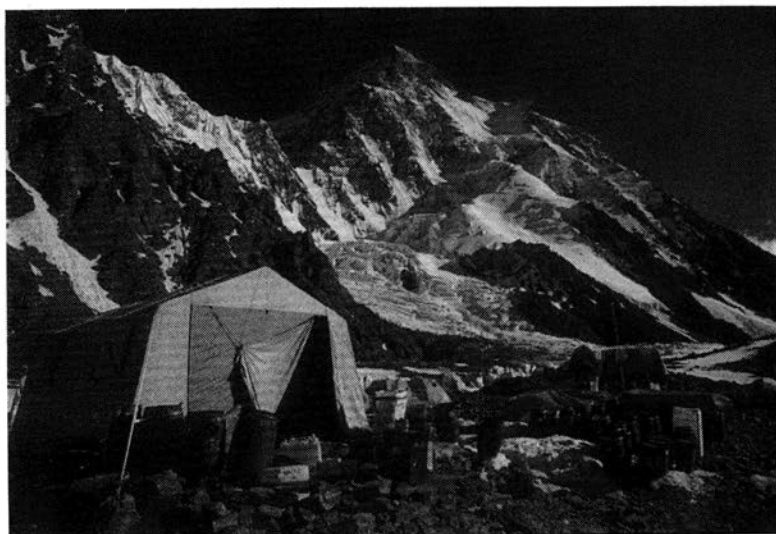


K2 登山隊 1996 12 人が登頂を果たす

隊長・山本 篤



ベースキャンプより K2 を望む



1996 年(平成 8 年)

10 月号 (No. 617)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目 次

K2 登山隊 1996 12 人が登頂を果たす	1
平成 8 年度自然保護全国集会	3
山と医療・ハチ刺傷ショック	4
支部だより	5
福井支部 山形支部 岐阜支部	
海外の山・エベレストの真実	6
東西南北	
ウエストン夫人と嘉門次	8
百周年記念図書展開催を願う	8
ピレネーの旅	9
図書紹介	10
『山岳警備隊出動せよ!!』『山と空と放射線』『空から見た信州の道』『海外合宿報告書』『信州の地質めぐり』『北極・南極(極地の自然環境と人間の営み)』『Spiti: Adventures in the Trans Himalaya』『ヒマラヤの東』	
報告・三水会現地集会	12
山の切手・初登頂周年記念Ⅱ	13
INFORMATION・ルーム日誌	14
図書室受入報告・新入会員・住所変更	15

▶ 日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜日 10~20時
水・金曜日 13~20時

▶ 図書室開室時間

日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13~20時

このたび、私たち青年部 K2 登山隊は、八月十二日、十四日の二日間に十二名を頂上に送り、九月一日、全員元気に帰国することができました。まずはこの登山を実施するにあたり、あらゆる面からご支援、ご援助くださった日本山岳会の方々、また隊員の出身大学関係者など外部の皆様、そして企業のご好意に心より感謝申し上げます。

■目的は学生登山界の活性化と若手の育成

今回の登山は、一九九五年度のマカール登山出発直前に、私と副隊長を務めた松原とが企画し、停滞気味といわれて久しい学生登山界の活性化と、日本山岳会の次代を担う若手の育成ということを大きな目的として推進することとなりました。そしてマカールより帰国後、ただちにルートの検討、メンバーの確保など準備

に入りました。

その結果、ルートはかのトモ・チエセンにより八六年、肩まで登られ、九四年にスペイン・バスクリンによって頂上まで完登された南南東リブに決定。十一月末には十大学十九名の隊員がそろいました。さらに、これらの準備と平行して、青年部担当の宇田川理事を中心に「支援する会」が発足。資金的、物質的なサポートを受け、五月の連休明けにはすべての準備を終えました。そして五月末、三隊に分かれて、勇躍パキスタンへ出発することができました。

■七千メートルの岩や氷を

ツルハシで削ってキャンプ設置

今年のカラコルムは、例年になく天気が悪く、キャラバンを経てベイスキャンプまでは順調に進んだものの、それ以後は次第に当初の計画から遅れていきました。

また、相応に困難視されていた南東リブのルートは、技術的にはさほどでもなかったのですが、全体に急峻で、テントを設営する場所がまるでありません。C1、C2とも予定よりずっと高所に、ようやく猫の額ほどのところを見つけて、どうか場所を確保しました。何と七千メートルのC2まで工事用のツルハシを荷揚げし、岩や氷を削ってのテント場づくりでした。



頂上に立つ第二次アタック隊の稲葉、竹内両隊員

げの負担が軽減し、経験の少ない若い隊員にはとくに好都合だったようです。一人の不調者も出さず、八千メートル近い最終キャンプに、十八名の登攀隊員中十六名が到達したことは、それだけで大きな成果であったと考えています。

■K2登山史上初の

二桁登頂者を出す

七月末にアタックに必要なすべての物資が最終キャンプに集結、休養のため全員がいったんベースキャンプに下りました。二日間の休養の後、予定していた九名のアタッカーを十二名に増やし、順次ベースキャンプ

次代に残そう美しい山と溪

を出発することにしていました。ところが八月三日よりまた悪天候となり、八日まで停滞を余儀なくされてしまいました。

このとき私は、上部に大量の新雪が積もり大変危険なこと、天候の周期が短くなり、もはや四〜五日の晴天は期待できないこと、そして何よりも長い停滞とそこからくるストレスで、一部の隊員の緊張感の持続が難しくなったなどの理由で、一度は登頂断念を決意しました。

しかし、若手の強い要望もあって、一つでもミスが出たら撤退する覚悟で、再度上部へ向かうことにしました。最終的には、頂上に立ちたいという強い情熱が悪天候に勝ったのでしようか、冒頭に記したとおり、K2登山史上初めての二桁の登頂者を出すことができました。この後一度として好天がこなかったことを考えても、本当にギリギリのところでの成功であったと、改めて幸運に感謝しています。

最後になりますが、この登山に参加した隊員たちには「よく頑張ってくれた」という思いでいっぱいです。そして、今回登り得たということに

おごることなく、また登り得なかった者は、その悔しさをバネにさらなる精進を重ね、K2という山で登山をしたという重みを感じつつ、各自のこれからの登山にその経験を反映していったほしいと思います。

『登山概要』

六月十六日 ベースキャンプ(五二〇〇メートル)到達、建設

六月二十七日 C1(六四〇〇メートル)到達

七月四日 C1建設

七月九日 C2(七〇五〇メートル)到達

七月十一日 C2建設

七月二十八日 C3(七八五〇メートル)到達

八月十一日 第一次アタック隊 C3建設

八月十二日 第一次アタック隊 村田、椎名、吉田

八月十四日 第二次アタック隊 登頂 通算第三登

八月十八日 登頂 (山本、稲葉、長久保、竹内、佐野、高橋)

ベースキャンプ撤収

平成八年度自然保護全国集会 ―国営あづみの公園、県営緑地問題を中心に―

自然保護委員会

本年度の自然保護全国集会は、九月七(土)・八(日)の両日にわたり、雨飾山山麓の長野県小谷温泉「山田旅館」を会場に開催された。ここは深田久弥はじめ岳人のゆかりの深い、歴史のある温泉宿である。今回の集会にあたっては、心尽くしのご配慮をいただいた。

未明からの激しい雨が朝になって降り止まず、当日のイベントであった雨飾山及び大渚山の登山は残念



熱心に討議する参加者たち

ながら中止となった。代わりの企画として、伊藤敏自然保護委員の解説で、雨の中、鎌池一周の自然観察会が実施された。尾瀬沼を思わせる静かなたたずまいの池である。森林の見方、樹木の名前など懇切な説明で大変勉強になった。

雨のため、当初のスケジュールは変更を余儀なくされた。そのために迷惑をおかけした参加者の方々には、お詫びを申し上げなければならぬ。八日午前中に予定していた集会の活動報告・討議を、七日午後には繰り上げて開催することとなった。

■集会討議内容

午後二時より、篠崎自然保護委員の司会で開会。

①まず中村副会長の挨拶。

―自然保護、環境問題は、地域の人が立ち上がらなるとなかなか解決しない。支部の人が問題を取り上げて、このような形でディスカッションし最善の策を考えていく、これは支部の在り方としても非常に期待できると思って見ている。全国から大勢の方が集まった第二十二回目の大会を

活発な討議で盛り上げてほしい。
②続いて、澤井自然保護委員長の活動報告。

―自然保護は、各支部にそれぞれいろいろな問題がある。したがって、全国の方々がこのように一堂に会して話し合うことは非常に重要である。今回この地を選んだのは、一昨年早川町で集会を開催したとき、信濃支部より国営アルプスあづみの公園問題の報告があったことによる。この問題はすでに一九八九年に提起されていたが、当時は岩菅山のオリンピック問題が優先されていた。

―集会の運営について、前回までは全国各支部にできるだけ公平に発言してもらおうと努めてきたが、今回は本部委員会の活動報告及び具体的に問題提起があった支部について時間を割いて討議を進めることとした。―自然保護委員会における最近の対応について。

・白神山地 世界遺産に指定されてから入山規制問題が起こっている。「規制に際してはこのように点に留意してほしい」とする要望書を委員会としてまとめた。

・鳥海山問題 イヌワシ生息調査検討委員会の報告について。また山形支部佐藤委員ほかの努力により日本山岳会自然保護委員会として、調査報告書をまとめることができた。

・ほかに屋久島の林道拡幅問題、その他自然保護委員会の活動について
③山の自然学講座の活動について
熊野委員から報告。

―自然保護の指導者・活動者の養成のために三年前より長期計画に基づき活動している。

●関西支部(斧田、坂下委員)

自然保護関係の山行、ブナを植える会に参画して、ブナの植樹、下草刈りを実施している。

●山陰支部(小西委員)

大山山頂の自然保護については、企業・県・環境庁共同しての活動で三分の二は緑化できた。

●静岡支部(西郷委員)

富士山の世界遺産登録問題及び米軍の演習地問題などについて。

●京都支部(秋野委員)

「美山町をエコミュージアム」にし、芦生の森を世界遺産にする作戦会議について。

*

休憩をはさみ、今回のメインテーマであるあづみの問題に入った。

①信濃支部・中野自然保護委員長

支部としては、自然保護委員四名を中心に検討をしている。山を愛する者にとって「国営アルプスあづみの公園」及び「県営鳥川溪谷緑地」計画で常念の中腹までケーブルがつく、あるいは夜電灯が点くというよう

うなことはしたくない。

②信濃支部・植松委員

「国営アルプスあづみの公園」計画は、安曇野の大町・松川並びに掘金・穂高地区併せて三五〇ヘクタールに及ぶ地域に「長野県内をはじめ広く三大都市圏の人々の多様なレクリエーションニーズに対応することを目的として国が整備を行う大規模な公園（建設省発行事業概要、パンフレットによる）を建設するものである。国営公園とは、自然公園ではなく都市公園法に基づき国が整備管理する都市公園である。

一方、「県営鳥川溪谷緑地」計画が国営公園に隣接して進められている。県は、「安曇野ナショナルリゾートエリア構想」というものを策定しており、長野県の五分の二を占める。リゾートとは、長期滞在型の保養施設である。国、県だけでなく民間による周辺開発も懸念される。

この計画は、用地買収も済んでおり止めることはできない。したがって、何とかいいものを作るという方向にもって行くしかない。アセスメントを実施させ、住民と十分協議し、住民が参加できる公園づくりを要望していきたい。

多くのスライドを使いながらのいい説明であった。紙数の都合もあり、詳細は自然保護委員会機関

紙「木の目草の芽」を参照願いたい。

③大会宣言の提案・澤井委員長

以上の趣旨を踏まえ、大会宣言を行いたい。明日現地を視察のうえ採択されれば、九月九日に長野県知事及び建設省建設事務所に提出のこととした旨提案があった。

■集会終了後、澤井委員長の司会のもと懇親会が開催された。

まず大蔵理事より挨拶。

自然保護は複雑かつ難しい問題が多いが、対応が遅いとなし崩しに物事が進むことになる。まず明確に意見を表明することが大切である。

続いて 小谷村・杉山助役より歓迎の挨拶があった。

信濃支部田中支部長の乾杯により、和気あいあいの中で各支部の自己紹介が行われた。なお、席上来年度集会は東海支部の協力のもとで行われることが発表された。

九月八日(日)

午前五時出発、大渚山に登る。雨飾山の南に位置し、北アルプスの眺望にすぐれる愛らしい形の山である。

九時、旅館を後にして視察へ。

ヒュッテ「星と嵐」の岸氏の案内で、オリンピック・ジャンプ台を見る。

立派な施設が完成しており、選手が練習をしていた。大町山岳博物館をのぞき、公園建設予定地へ。NHKはじめ新聞各紙が取材にくる。

山と医療

ハチ刺傷ショック

堀井昌子

「ハチ刺傷時の自己注射で日医が慎重対応求める通知」昨年9月の日本医師会FAXニュースの見出しである。

新聞にも報道されたが、林野庁が営林署の一部の職員にエピネフリン自動注射器による自己注射を導入したことに対する医師会の心配、すなわち、この注射で事故が起きたときの責任の所在について懸念したものである。責任の所在云々はともかく、このことは、ハチアレルギーのある「山や」には大いに関心のあるところで、会員の方からも問い合わせをいただいた。

ハチに限らず、成人の場合、虫刺されによって4人に1人がその毒素に対して敏感になる、すなわち次に刺されたときにアナフィラキシーシ

ョックを起こす確率が高いとされている。そこで、大学にいる皮膚科のドクター、厚生省薬務局などに照会したが、結論は、現時点ではこの外国製の自動注射器のキットは入手不可能とのことであった。そして最近、林野庁厚生課の担当官に問い合わせたところでは、全国の営林署職員で、管理医が必要と判断し、かつ、同意した2000人以上の人が携行して、95年は2件、96年は7月現在までに1件の使用例があったが、いずれも有効で、医学的トラブルはなかった由である。

ハチ刺されによる死亡者は年平均36人と有毒動物による死亡の中では圧倒的に多く、大部分はアナフィラキシー反応、すなわち、毒素に対する感受性増加によりショックに陥るもので、その約8割がスズメバチによるものと推定されている。刺されて15分以内に起こるアナフィラキシーショックを予防・軽減するにはエピネフリンの注射に勝るものはない。しかし、現状ではこのキットは手に入らないので、ハチアレルギーのある人はハチに刺されないことが唯一、最大の防御法といえよう。

すでに「ほりでーゆー四季の郷」という村営温泉施設が営業をしており、反対側が柵で仕切られて公園予定地の看板が立っている。鳥川では子供たちが水遊びを楽しんでいた。

安曇野は何の手を加えなくとも、このあるがままが自然公園であること、何の施設を作らなくとも、そのままが一番楽しめるところである、との思いを強くした。

田淵行男記念館前で参加者の拍手により大会宣言を採択、全日程を終え午後三時散会した。

最後に、集会開催にあたり、信濃支部の皆様にも多大のご尽力をいただいたことをお礼申し上げる。

*参加者／信濃、宮城、越後、京都、富山、石川、関西、山陰、福岡各支部自然保護委員、一般会員、計六十名。
(篠崎 仁)



親子登山の参加者は総勢157人

’96夏休み・親子白山登山

福井支部

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

八月十一、十二日に福井新聞社、FBC福井放送と共催で親子登山を開催した。登山を通して、自然の中で親子の語らい、絆を深めようというもので、県内の小学生百三十八人、当支部員十五人ほか総勢百五十七人が参加した。

十一日朝、福井を出発し、石川県白峰村の別当出合いから登山開始。初めての人も多かったが、元氣よく午後三時室堂小屋に到着、一泊した。

十二日は、午前四時に起床、山頂の御前峰を目指し、同五時八分ごろ来光を拝んだ。帰りは大小の池を巡り、雪渓を見ながらエコーラインへ。高山植物の咲き乱れるお花畑に見とれながら下山した。

今回のような子どもを加えた企画は初めてであったが、何とか安全にかつ親子ともども自然の偉大さを体験してくれたと思う。非常に有意義であった。
(宮本数男)

山形支部

八月例会

尾瀬・会津駒ヶ岳山行

東北大会以来久々の支部山行は、二泊三日の尾瀬・会津駒ヶ岳である。参加者六名は、八月二十三日早朝、山形市工業技術センターに集合。車で大峠を越えて福島県に入り、檜枝



会津駒ヶ岳山頂はもう秋の気配

岐村を目指した。途中、会津西街道、下野街道を結ぶ街道筋の大内宿に立ち寄る。茅葺き屋根の素晴らしく大きな家が幅広い道路を挟んで両側に建ち並び、住民が恵まれた自然環境の中で日常生活を営んでいる姿に往時を偲ぶ。

その後、天然記念物に指定されている駒止湿原に立ち寄り、木道で整備された三か所の湿原を散策する。晴天続きのためか季節の花もあまり咲いていない。湿原を離れた開拓作業用道路筋は、そばの花が満開で見事な光景である。高原の涼風にススキの穂も揺れ、秋はもうそこまできていることが肌で感じられた。

檜枝岐村には夕暮れ迫る頃に到着。温泉に疲れた身体をいやす。夕食は檜枝岐ならではの郷土料理に舌鼓を打つ。夜半、激しく屋根を打つ雨音

に目覚める。

二十四日早朝、小雨の中、宿舎を出発。沼山峠から尾瀬沼に行き、沼を一周して再び峠に戻り、檜枝岐に帰る。ここで二十二日から至仏岳や尾瀬ヶ原を散策してきた同僚の今野秀穂さんと合流した。

二十五日は晴天に恵まれ、谷川から吹いてくる風はヒンヤリと冷たい。宿舎を五時三十分出発。滝沢橋を渡り、林道終点まで車で行く。標高一〇〇〇メートルの地点から木で作られた梯子を登りきると、急坂が続く。アオモリトドマツの樹林帯を登るにつれて部分的に視界も開け、急坂も次第になだらかになる。

水場まで三分とある標識からしばらく登ると、木立ちの間に頂上から中門岳に連なる尾根が望めた。登るに従い登山道は木道に変わり、湿原が現れる。小さな池塘もあちこちに点在していた。駒の小屋も見える。急な木道の登りもとひと息……。

小屋(二〇六メートル)前では先客がのんびりとくつろいでいた。ひと息入れて、頂上を目指す。駒ヶ岳(二一三二メートル)山頂には一等三角点標と会津駒ヶ岳山頂と記された木柱が建っていた。全員で記念写真を撮り、一行中三名は中門岳まで往復する。美しい緑の湿原に点にする池塘と残雪、木道を歩く足も自

然に弾む。

好天に恵まれ、三六〇度の視界を堪能し、下山の足の運びも軽い。頂上で別れた一行に水場手前で追いつき、林道終点駐車場まで下山。名残を惜しみつつ車上の人となり山形へ。

(阿部勇作)

岐阜支部

モンゴル・オトゴンテンゲル峰 平均六十一歳全員登頂

八月、私たちはモンゴル西部ハンガイ山脈の最高峰オトゴンテンゲル(四〇三二メートル)に登頂した。なだらかな四千メートル峰として、ガイドブックにも記載のあるモンゴルの霊山である。七十代を頭に四十代まで九人全員が登頂を果たしたのみならず、エーデルワイス咲き乱れる草原と、霊峰トレッキングといった悠久の天地の風情をも味わうことができた。

八月二日、「日本山岳会岐阜支部・山梨支部合同モンゴル・オトゴンテンゲル登山隊」総勢二十一人は関西空港を出発、モンゴル航空でウランバートルへ。同夜、あらかじめ船便送りの山用ガスボンベの不着を知り、ACでのコンロ使用を断念。まずは最初の番狂わせ。また、天候悪化の兆しで三日午後のチャーターへ

海外の山

エベレストの 真実

江本嘉伸

時間がたたなければ見えてこないものがある。複雑な状況の中で、複数の国の人間が関わっている場合はなおのことだ。五月十日から十一日にかけてエベレストで起きた悲劇も例外ではない。

日本では難波康子の登頂と悲報を中心とした報道だったために、かえって全体像が見えにくかったが、今回の登攀と遭難についてはアメリカ、ニュージーランド、インド、デンマークなど各国の新聞、山岳雑誌が大きく取り上げた。その中で、米「アウトサイド」誌九月号に難波康子とともにロブ・ホール率いる公募隊に参加した登山家であり、ジャーナリストのジョン・クラカワーが登頂と生還の模様を克明に書いたドキュメントが出色だ。

「薄い空気の中へ」と題したこのドキュメントの中でクラカワーは、遭難した二つの国際公募隊、台湾隊などについて冷静に、しかし隠すことなく記述している。

たとえば、頂上直下のルート工作

の遅れについて。この時期、南東稜ルートの上部にはルート工作ができていなかった。そのため、国際公募隊の二人のリーダー、ロブ・ホールとスコット・フィッシャーは、アタック当日になったらそれぞれの隊のシェルパリーダー、アン・ドルジェとロブサンを九十分早く先行させ、難所にザイルを張ることをベースキャンプで申し合わせていた。

が、それが実行されなかった。エベレストに二度無酸素登頂した経験を持つ二十五歳のロブサンが(多額のボーナスを期待して、と推測された)もっぱら最後尾付近で「セブン・サミット」の達成を目指す「ニューヨーク社交界の華」サンデー・ヒル・ピットマンとザイルで結び、引っ張りあげることに専念したのだ。

アン・ドルジェも疲れ果てロブサンがやらないのなら、と頂上直下のルート工作を放棄した。

やむなく、フィッシャー隊のガイド役のひとり、バイドルマンがザイルを張ったが、その間頂上直下で「客」たちは行列を作り、一時間以上も待たされるハメになった。

行列といえ、この九月、米ABCテレビが、夜のニュース番組の中で「無慈悲の山、エベレスト」(Mount Everest without mercy)というシ

リーズを放映した。そこに映し出される八千八百メートルでの賑わいの模様は、ヒマラヤ登山の現状を考える上で衝撃的だった。切り立った稜線の直下をへずるように、登山者たちが一列になって進んでいる。そこはガイドへの依頼心だけでは到底登下降できない現場だった。

クラカワーによれば、難波康子は登頂当日は非常にエネルギーギッシュで、常に最前列にいたいらしい。それが、生還までもう一步のところまで力尽きた。闇の中で生死の戦いを回想した後、バイルドマンが語った難波の最後の場面は痛切だ。

「私はヤスコを立たせようとした。彼女は私の腕をつかんだが、弱りすぎて膝以上立ち上がれなかった。私は彼女を引きずったまま一、二歩歩いた。彼女の指がゆるみ、その場に倒れた。私はやむなく先に進んだ。誰かが行ってテントに助けを求めなければ皆が死んでしまう」

以後、ヤスコのことがバイルドマンの頭から離れないという。

「私は彼女の指が私の腕をすり抜け、離れてゆくのを今も感じている……」

九月三十日、あの小西政継がマナスルに登頂後、消えた。またも、山中の遭難である。

リ便は朝一番に変更との報に、ミネラルウォーター現地調達予定者はあわててホテルに交渉、一人当たり六リットルでは、と不安がつる。

三日、ミル18型大型ヘリを二機連ね、通訳、添乗員とBCへ。途中、給油地バヤン・ホンゴルを経て一〇〇キロ近く、計四時間半のフライト。四駆トラックで先着の現地スタッフが出迎えるBCに十五時過ぎ着すでにゲルとテントが張られている。高度計は二六五〇メートルを指している。鍋を伏せた形に雪を頂くオトゴンテンゲルは西方に指呼の間だが、一目でガイドブックの収録写真より険しいと覚悟。安易そうなルートは唯一、南側から頂上台地に延びる雪稜である。が、斜度は三〇度を下るまい。夕食はモンゴルスタッフのキヤンプ料理。まずはうまい。

四日、ズーンソガ谷左岸のBCから溪流を徒渉、などらかな草の丘を時雨に見舞われつつ三キロほど上り、バダルホンダカ湖北の斜面から最後の台地上がり着き、AC設営。標高三三三〇メートル。高緯度のモンゴルは半日夜のため二十二時過ぎまで明るい、水戻し餅などで早めに夕食。高度の影響で顔が丸くむくむ隊員が出る。頂上は終日雲の中。

五日、明るくなった七時過ぎ出発。前夜の冷え込みで霜の厚いガラ場を



BCからオトゴンテンゲル峰を望む

実にゆっくり登る。後刻、これが脱落者なしの効果をもたらす。富士山七、八合目の雰囲気だが踏み跡はなく、ガスのため視界は数百メートル。帰りのために多量用意の蛍光赤布片を目立つ岩上に広げて石を置く。雷鳥の親子発見の声が上がるが、よく見えないまま逃げ去る。三五〇〇メートル辺りか意外な高所にオポー(宗教的な石積み)も見た。

九時二十五分、雪線手前の三七〇〇メートル地点で古い遭難飛行機の残骸、破片多数に出くわし、先程からチラチラ見えた人工物の正体が判明。九時四十分、雪線に着く。ほぼ富士山頂高度に当たる三七七〇メートル。アイゼン装着。後続の山梨隊と別れる。

爆裂火口とおぼしき崖を左に見な

がら広い馬の背状の雪稜に歩を進める。相変わらずのガスで視界は約百メートル。鍋を伏せた形の頂上台地まで標高差二百数十メートルのはずだが、下部の数十メートルの雪が思いのほかの堅雪、ピッケルのブレードでステップを刻む作業を余儀なくされる。なんと二センチほどのざらめ雪の下は氷。ために一步に数撃を要し、隊長指示とはいえ果てしなく時間を食う苦戦を続ける。コウモリ傘一本を持ちアイゼンなしの現地ガイド、チャグナ氏が後ろからザイルを引っ張り、軟らかい登路を身振りや片言英語で示すこと数度。時折あらに叩かれながら我ら中高年登山隊は牛の歩みを続ける。

昼過ぎようやくたどり着いた頂上台地は意外に狭い。ピーク寸前の幅一メートルのクレバスを乗り越すのにチャグナ氏が活躍し、十二時五十分、青布(後にこの国で敬意を表する色と知る)付きの棒が残置されたピークに全員がたどりついた。指を下に向け、「オトゴンテンゲル・ピーク?」とガイドに確認。彼は同じ言葉で答える。?抜きで。

記念撮影後の下山が緊張もの。ザイル不足がづらいが、二パーティーに分かれアンザイレンのうえ慎重に下る。目印の蛍光布を回収しながら、要所では後尾の者が確保しつつ一層

慎重に。みぞれ降る雪線帰着十四時四十分。AC撤収後、一気にBCへ。途中、迎いのジープに荷を託し、空身でのBC着は早い者で十八時五十分。中高年にはこたえる十二時間だった。

登頂翌日の予備日はからりと晴れた。オトゴンテンゲルはモンゴル語で天の末っ子の意である。この日、末っ子は新雪で化粧直した頂をBC到着以来初めて私たちに見せた。そしてこの日限り、二度と見せてくれなかった。時雨のため二日間へりは来ず、BCの食糧は尽きた。次の日にへり飛来。十一日関西空港に帰国。(村松哲彦)

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

東西南北

ウエストン夫人と嘉門次

田畑真一

大正二年八月、ウエストンは夫人とともに槍ヶ岳へ登頂した。これは前年、十九年ぶりに再会した上條嘉門次の案内による。

とくに夫人の場合、女性による初登頂である。同月、夫人は焼岳や霞沢岳にも登頂。さらには奥穂高岳へも登頂、これがまた女性による初登頂となった。九月に入ってから白馬岳へもである。

その精力的な登頂もさることながら、そのほとんどが嘉門次の案内であることを考えれば、それはウエストンへの嘉門次の提言の実行だった。ウエストンは次のように述べている。「上高地溪谷を立ち去る前に、嘉門次は、あの『物静かな池』のほりにある、彼が独りで住んでいる棲家に来て見てほしいと、私に言った。(田畑注、中略)最後に、次の年に奥様を彼の住居にお連れいただき、彼と一緒に、今まで女性が登ったこ

とのない大きな山々の神祕を探索して下さるように―それを十回も繰り返せば気が済む、といった気持ちで―私に頼み、それを約束させた」(『極東の遊歩場』)

大正二年八月、上高地を後にするときの記録である。その精力的な登頂こそ、嘉門次がウエストンと夫人に捧げた熱い思いであり、その結実だった。嘉門次の提言がなければ実現しなかった登頂の数々でもある。

百周年記念山岳図書館展の開催を願う

正橋剛二

昨年筆者は、天保十五年夏に、加賀藩儒者・金子盤嶋(当時五十二歳、八十石)と侍・榊原守郁(当時三十歳、部屋住み、後百三十石)の二人による立山登山の克明な記録を一冊(注1)にまとめ上梓した。この際、守郁による『立嶽登臨図記』は、実は長老小島烏水翁愛蔵の写本(小島本)を当地の先達中島正文氏によっ

て複写されたものであること、烏水翁の写本の原本は高木利太氏の秘蔵本(高木本、おそらく守郁の描いた原図)であること、また小島本は翁自身の解説で昭和十年五月、日本山岳会設立三十周年記念の山岳図書館展に出品されたことなどを確かめることができた。そして、小島本、高木本の所在を私なりに追跡を試みたが、片田舎ではとても不可能で断念せざるを得なかった。

ところが、『学鑑』九三巻八号(一九九六)で、紅野敏郎氏の『学鑑』を読む(九一)―深田久弥―により別表の通り、丸善を会場に、その後も三回(計四回)展覧会のあったことを教えられた。『立嶽登臨図記』はおそらく、第四回にも再び展示されたと推定するが、目下このときの展示目録を追求中である。

さて、別表によると昭和十年以後、日本山岳会は十一年ないし十四年の間隔で展覧会を開催しており、昭和四十八年以後のことはよくわからないうが、どうも途絶えているように思われる。

間もなく日本山岳会は百周年を迎え、種々行事も計画されていると聞くが、是非前記に続く第五回目をと願うものである。筆者以外にもこのような要望の向きもあるかと思ひ、敢えて筆を執った次第である。

日本山岳会図書館展覧会一覧 (日本橋・丸善会場)

回	主催者 展示会名	年月・会期	展示目録の有無 展示点数	備考
1	日本山岳会 「山岳図書館展」	1935(昭和10) 5/3-5/7	あり(56ページ) 和書33、洋書 182点	口絵に立嶽登臨図記(小島本) 日本山岳会設立30周年記念
2	同上	1948(昭和23) 7/8から1週間	不明(不明) 点数不明	
3	不明 「ヒマラヤ文献展覧会」	1959(昭和34) 6/1-6/6	あり(不明) 339点〔戦前 122点 戦後 217点〕	小林義正、望月達夫、深田久弥3氏が所蔵文献を持ち寄って展示
4	日本山岳会 「近代登山の先駆者たち」	1973(昭和48) 12/24 - 12/29	あり(129ページ) 点数不明	小島烏水、木暮理太郎、岡野金次郎 生誕100周年記念

(注1) 正橋剛二解説、校注『立山遊記』『立嶽登臨図記』桂書房(富山市)平成七年刊。本書は先に会報「山」六一〇号(一九九六)に三好まき子氏により紹介されております。また日本山岳会に数冊寄贈しましたので、ルーム図書室で閲覧可能です。

●日本山岳会編『山岳総合索引』緑蔭書房(東京都)一九九二年刊。右の索引では、別表の第一回の記事以外には収載がない。

ピレネーの旅 ーベルディグエローー

中村純二

ピレネーの旅は今年で八回目になる。昨年はモンブランやグロスゴックナーに登ったが、人の少ない点リフトや車道が少ない点、山道に道標などなく、ケルンだけが目印の点など、私どもはやはりピレネーに惹かれる。日本人はあまり来ないと思えて、小屋番や登山者の覚えはめでたく、名前まで覚えていくれたり、アネトやポセツの頂上で会ったことを覚えていくれたりする。

人間が少ないと野生も豊かで、カモシカ、アイベックス、シカの群れ、ナキウサギ、ライチョウなどにもよ

くお目にかかる。アルプスや日本アルプスで少なくなってきたエーデルワイスやチョウノスケソウが足の踏み場もないほど咲いているところもある。

ベルディグエロ(三二二メートル)はエストス谷左岸に聳える雄峰だが、私どもはこれまで登路を誤ったり、小屋から遠いため時間切れになったりしてまだ登っていない。今回は標高二二〇〇メートルの無人の石小屋を利用し登る計画を立てた。

七月二十六日、ジープでサンタ・アナの小屋まで登り、ここから少しやぶこぎをして石室を目指す。雷雨のため少し濡れたが、石室に相客はなく、ゆっくり炊事を始める。夕方外に出ると、三〇メートルほど先の岩頭にカモシカが現れ、好奇心いっぱいに私どもを眺めている。写真を撮ったりして十分くらい眺めていたが、こっちが根負けして先に石室に戻った。

翌朝は晴、二七五〇メートルのオバゴ峠まで、ゲエロ峰前峰であるいい形の岩峰の基部に沿ってガレを登る。ガレの下では十数匹のナキウサギが高い声で啼いているが、姿を見せることはほとんどない。碧色のガルガゴ湖の先には、これもゲエロ峰のもう一つの前峰であるガルガゴ峠が鋭く聳えている。

峠では二パーティーと一緒にになり、一隊はここにテントを張り、空身で往復の様子だ。ここからは岩稜になる。イトデ峰三一七〇メートルでは一般コースから外れ、小さいケルンを頼りに七十度くらいの岩壁を登らされた。

頂稜の肩で昼食、この頃から急に暗雲が出、雷鳴が聞こえてきた。やがて両手指と髪の毛はブラシ放電のためジイジイと音を立て始める。稜線を避け、数メートル下を飛び石伝いに歩いたが、どうしても稜線通過の必要のあるところでは、一旦立ち止まり、雷光の直後に越えることにした。最後の雪渓を登り切るところが頂上であった。しかし一面のガスのため、せっかくの大展望は諦めざるをえなかった。

下山を始めると雹、やがて大粒の雨となった。岩苔のついた岩は急に滑りやすくなり、何度か足を滑らせて緊張する。しかしイトデに着く頃には雨も止み、オバゴ峠では衣類も乾き、氷の張ったリテロラ湖が眼下に美しく輝いていた。

ところが、峠を後にすると、今度は本格的な横なぐりの大雨となり、石室に着いた時は下着までずぶ濡れであった。今夜も石室は私ども二人だけなので、ゆっくり着替える。

雨は夜になって止んだが、夜中に

風がますます強くなり、入り口に向かって吹きつける。石積み側の側壁は穴だらけなので風はまともに石室内部を吹き抜け、敷物を舞い上げるほどだ。私どもは荷物を少しでも軽くするため、シュラフは持参せず、シュラフカバーだけなので誠に寒い一夜となった。

二十八日の朝、風雨は止み、明るい空が広がっていった。最高峰のアネト三四〇四メートルや、第二の高峰ポセツ三三七五メートル、美しい草原や湿原、それに何よりもゲエロの主峰と力強く立派な二つの前峰が真近に聳えて朝日に輝き、誠に素晴らしい眺めであった。

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

 前田製管株式会社

本社/酒田市上本町6-7

☎ (0234) 23-5111

図書紹介



カット 中村あや

富山県警察山岳警備隊・編 「山岳警備隊出動せよ」

富山県警察山岳警備隊による山岳遭難救助の記録と、警備隊員の日々の訓練の模様を、ドキュメンタリーに綴ったものである。

「落ちるなら富山県側へ」と登山者に言われしめ、それを自他共に認めている警備隊の、体、技、物、三面の充実ぶりが、隊員の遭難救助の手記を通じて余すところなく伝えられている。救命率の向上と後遺症なき社会復帰を命題として迅速な救助を目指し、無線やヘリコプターが大活躍するが、夜間は無論のこと、天候や地形の条件が悪くなればなるほど、結局のところ最後は救助隊の人力が頼りとなる。日ごろの地味な訓練と努力がものをいうことになる。

中高年登山者の遭難や、やっと遭難現場に着いたら、救助隊員より遭難者のほうが元気であった、などと

現代の世相を反映しているような事例も紹介されている。

陰惨、暗澹、という言葉がすぐ浮かんでくるなんともやりきれない印象を持ちがちなこの種の本であるが、隊員の一人ひとりの手記が、使命感に燃えた行動を描写していると共に、遭難したパーティーの、仲間の気持ちの思いやりという、暖かいゆとりを持った心、また率直で面白い文章に救われ、むしろさわやかな読後感を持つことができた。(岩瀬皓祐)

一九九六年七月 東京新聞出版局
発行 二八六ページ 千四百円

野口邦和・著

「山と空と放射線」

本書は山のド素人を自認する著者が、ふとしたきっかけで、エベレスト北東稜の初完登を達成した日大隊の学術調査隊員となり、エベレスト周辺の環境放射線の調査を行った際の個人的体験によるものである。

前半の第一部と第二部はそれぞれ道中記と生活日記、不馴れな山中での放射線測定にまつわる涙と笑いの苦心談とその測定結果がまとめられている。山のベテランとはひと味違った視点が初々しく、普通人の目で見えた山男たちの生態が興味をひく。高地における環境放射線の増加は

一般論として宇宙線学者の間では常識であったにもかかわらず、登山と関連させて直接測定した例はこれまでにない。その点、放射線防護学を専門とする著者ならではのテーマであるが、広く学内から隊員を募り、登山経験の十分でない著者にも豊富な測定機材とサポートを用意して、貴重なデータを持ち帰らせた日大隊の懐の深さも光っている。

第三部では著者がエベレストへ行くきっかけとなった、国際線ジェット機乗務員の宇宙線被曝の問題が紹介され、第四部が放射線自体の解説に当てられている。このような問題に早くからかわってきた著者の蓄積があるからこそ、今回の調査に明確な課題意識が持てたのであろうし、第二部の結果に対するよい比較材料にもなっている。(古市進)

一九九六年七月 リベルタ出版発行
行 二三八ページ 二千六十円

信濃毎日新聞社・企画編集

「空から見た信州の道」

重く大きく美しい空撮写真集の主題は道であって山ではない。この写真集の誕生の動機は、複雑な山岳地形を克服して整備著しい長野県の道路交通網を印象づけることにあった。従って山間の平地と都市が近景をな

していて、山々は精度の高いパノラマ写真の背景の役目に甘んじている。高山に接近して登山道を写すということは本書の目的に含まれていなかったから、登山者の歩行ルートの大写しを期待してはいけない。そう理解した上で本書に収められた写真を見ると、産業の発展を阻害してきた山々に道を拓くことの困難さがよくわかる。刻まれた道を生活改善の証しと見るか、痛ましい傷と見るか、見る人の思いによって感想は大きく分かれるだろう。いろいろ考えさせる写真集である。

ところで、道に焦点を合わせたという点で、一九九一年にスイスで出版された『スイス 上空から見た土地』が本書と似ている。内外二つの写真集を比較してみれば、様々な観察と感想と議論が誘発されるだろう。

一九九四年九月 信濃毎日新聞社
発行 二五三ページ 一万六千円

明治大学山岳部 インドヒマラヤ登山隊一九九五

「海外合宿報告書」

インドヒマラヤ・ガングスタン峰」

大学山岳部の部員減と活力の低下が久しい沈滞の中、初の学生のみによるヒマラヤ遠征である。

計画は一九九三年四月、部の存続をかけて「憧れのヒマラヤで合宿を行いたい」としてスタートした。三年目にして「ガングスタン登頂、高所登山の経験、部の活性化を図る」を目的に掲げ、一九九五年七月二十七日～九月二十三日まで、五十九日間の日程で合宿を行い、全員登頂している。隊員は現役七名(女性を含む)、OB二名、ほかに現地でのコック三名、リエゾンオフィサー一名、手続き関係の通訳一名、エスコート一名である。

本文は報告書スタイルで巻頭に山岳部長の「健闘をたたえて」―序にかえて―をはじめ、国内準備記録、渉外係報告、一般検討、成果、課題、

各人感想文等、今後の学校山岳部海外合宿に参考となることが多い、力が入っていたいねいな報告書となっている。(三沢一三)

一九九六年六月 明治大学山岳部
発行 一〇〇ページ 非売品

地学団体研究会 松本支部・編
自然史ハイキング

「信州の地質めぐり」

最初に長野県全般にわたっての地質と、その歴史が解説されている。とくに長野県は、糸魚川・静岡構造線及び、中央構造線に位置していることから、地質学的にもかなり複雑な地形のようである。

平成八年度「海外登山基金」助成登山計画募集

海外登山基金委員会

平成八年度の海外登山基金による助成登山計画の募集を、左記のとおり行います。ふるってご応募ください。

対象 平成九年二月一日～平成十年一月末に出発する登山隊。会員の推薦があれば、隊の規模の大小は問いません。
申込方法 所定の様式(本会事務

局に請求してください)に記入し、登山計画書(十五部)を添付して申請してください。
申込締切 平成八年十二月二十日
審査ならびに交付の時期 平成九年一月中旬に審査を行い、二月の理事会で決定し、二月中旬～三月末までに交付します。
交付金額 百万円です。

その知識を背景に、長野県各地十二か所にわたり、その地域の地質について、観察の場所を含め極めて具体的な解説がなされている。

私たちが登山で行く場所も数多く書かれている。例えば、上高地・釜トンネルの硬い岩石のこと、穂高滝谷の岩、大キレットの生成、美ヶ原の過去、御岳の火山活動などなど。

直接登山とは関係がないとはいえ、次回信州の山に出かけるときには、この本を持参し、ちょっと観察してみようという気にさせる本である。

なお地学団体研究会は、地学の創造と普及、地学研究の環境づくりを目指して、一九四七年に結成された学術団体である。(茂見 猛)

一九九五年七月 郷土出版社発行
二六五ページ 千六百円

バーナード・ストーンハウス・著
神沼克伊・三方洋子・訳

「北極・南極(極地の自然環境と人間の営み)」

北極は陸に囲まれた海盆であり、南極は海に囲まれた高い大陸である。この地理的違いがもたらす両極地の様々な特徴が、互いを対比させることにより明確に示されている。

巻頭の極地の定義、気象にはじまり、氷の分析、海・陸の生物、そし

て初期の探検、観測隊、さらに現代の極域科学や政治的側面まで、極地の自然と人間の営みを多くの資料とともに要領よく紹介している。近代の科学的測定技術、人工衛星や北極海の下を自由に航行できる原子力潜水艦などにより、極地の観測精度は飛躍的に高くなり、極地は地球の状態を知るための精密なセンサーとなっていることがわかる。

豊富なカラー写真や図表、コラム記事の解説を拾い読みするだけでもかなりの極地通になれるが、通読することにより、長年にわたりエコロジストとして極地にかかわってきた著者の極地を通した地球に対する思

カマンズ
直行便

JAZで行く

エベレスト
アンナプルナ
ランタン他

ジャパンエアーチャーター

ネパール・ヒマラヤトレッキング9日間

①11/8金 ②11/15金 ③12/27金 発 ¥268,000より

運輸大臣登録旅行業490号/日本旅行業協会正会員/ATA公認代理店

アール・エス・サービス株式会社

本社/〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06-444-3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557
仙台 ☎022(265)4611 広島 ☎082(542)1660 札幌 ☎011(711)7106
(株)りんくう観光

いが伝わる書である (狩野芳郎)

一九九六年六月 朝倉書店発行
二二三ページ 九千九百九十一円

Harish Kapadia・著

Spiti: Adventures in the Trans-Himalaya

著者カパディアの名は、日本でもかなり知られていると思う。『ヒマラヤン・ジャーナル』の名編集者で、十八年間も編集を続けている。

彼は今までにも三冊の本を出しているが、いずれもヒマラヤの未知の地域に関するものである。今回の著書も、三十年以上も外国人の訪問が禁止されていた、一九九三年にやっとその禁止が解けた地域、インドのヒマチヤル・プラデシュ州に属するスピティの紀行及び案内である。

スピティはヒマラヤの主脈から外れ、トランスヒマラヤに入り、目立った高峰はなく、最高峰はシラ(六三〇三メートル)である。今まで外国人があまり訪れたことがなく、文献もほとんどない地域なので、この本の有用性は高い。紹介者の豊富な写真を眺めながら、訪ねてみたい誘惑に駆られた。今では車で簡単に入れるとあってはなおさらである。

インド発行の本も用紙も良質になり、製本もかなり改善された。大判

の楽しい本である。 (水野 勉)

一九九六年 Indus Publishing 刊
二二六ページ 一一五〇ルピー

中村 保・著

「ジュンパの東」

雲南、四川、東南チベット、ビルマ北部にかけて複雑な皺を刻む横断山脈。長江、メコン、イラワジなど五つの大河の上流部が浸食地勢を形成し、分水嶺は高く、谷は深い。その全域を中村氏は五年がかりで踏査して、見事な紀行を上梓した。手にとるだけで興奮を誘う本である。

何よりも嬉しいのは、我々に唯一残された未知の地帯を体系的に紹介してくれたことだが、本書を読んで心から敬意を表したいのは、著者の風土を見る目の確かさと多様さである。地理的景観の的確な把握(多数の挿入写真の美しさ)もさることながら、そこに住む様々な少数民族に注がれる目の優しさ、過去の探検・登攀史への目配りの広さ、この地の歴史と現在に対する洞察の深さ(著者は紅軍の長征の足跡までたどる)は、本書に凡百の紀行を超えた古典的価値を付与している。中村氏の快挙に喝采したい。(平井吉夫)

一九九六年三月 山と溪谷社発行
三三〇ページ 三千円

REPORT



REPORT

三水会現地集会

大山北尾根・春岳沢

三水会は八月十七日、大山(神奈川、一二五二メートル)で現地集会を催した。山行のあと麓の旅館で豆腐料理を楽しみながらの反省会、幹事役の阿部一孝さんが「今年のお盆も大山詣でができました、ご先祖の供養になったことと存じます」としめくくった。

この時期の大山詣でが恒例となっており、今年で四回目。暑いさなか大山なんて、と思うのだが、その阿部さんが「だまされたと思ってご参加ください」というので始まったいきさつがある。

大山は雨降山、阿夫利山とも呼ばれる。頂上に阿夫利神社が祭られ、下社から二十八丁目までの参道がある。一般には表参道のほかイタツミ尾根、雷の峰尾根などのコースがあるが、それらのどれでもなく北尾根を登ろうというのだった。

その北尾根が実に涼しい。午前九

時前、小田急線秦野から出発、タクシーに分乗する。ヤビツ峠まではバスが通っているが、登り口は峠をやり過ぎた丹沢林道・地獄沢にある。地形図には地名もルートも記されていない。しかし、道はしっかりしている。送電線の巡視路のようである。十六号鉄塔にたどり着くと、あとは尾根道を行く。汗がドッと吹き出してくる。のちほど調べると、コルには水干の頭、水無の頭などと雨降山にしては水に縁のない名前がつけられていたが、緑に覆われた尾根道に涼風が吹き抜ける。汗をぬぐってくれるから、登りが苦にならない。最後の猛烈な藪をぐぐり抜けると、いきなり広場に出る。阿夫利神社の上宮だ。

この日は、二つのグループに分かれた。さすがに四回目となると、ちよっと違ったルートを楽しみたいというので、平澤哲臣さんの音頭で有志が沢登りを選んだ。このほうは小田急線秦野からバスで養毛までいき、春岳沢をつめた。

丹沢・大山は名水の多いことでも

山の切手13

初登頂周年記念・II

相山之良

トリグラフは、スロベニア西北部ユーリッシェ・アルペンの最高峰である。金色の角をもったカモシカ〈ズラトログ〉が棲むことで知られるが、ここは第二次大戦で戦った勇猛なパルティザンの舞台であった。トリグラフ北壁の麓に、高さ五メートルのピトンとカラビナを象った記念碑が建っている。初登頂は、一七七八年八月二十六日ウイロニツツア一らのパーティーによってなされ、二百周年の記念切手が旧ユーゴから発行された。

ぶ。一九六五年に百周年の多彩な行事が行われ、記念切手も発行された。ほかにブラジルのデド・デ・デウス初登頂五十年、エベレスト初登頂二十五年の記念切手がある。また、初登頂ではないが、火山の噴火に関する周年切手についてふれておこう。アイスランド南東部に、ラキ火山を中心としたラーカギーガルと呼ばれる火口列が連なる。一七八三年六月地震が群発し、突然大地が二五キロメートルにわたって裂け、大量の溶岩を流出しはじめた。噴出した有毒ガスや火山灰によって家畜の四分の三が斃れ、当時のアイスランド人口の五分の一にあたる一万人が餓死した。これが、歴史時代に起きた地球上最大の広域割れ目噴火であり、二百周年にあたって切手が発行された。

インドネシアのジャワ島とスマトラ島の間にあるクラカタウは、一八八三年五月、二百年の静穏を破って活動を再開した。八月二十六日大爆発を起し、島の大部分が吹き飛んで、巨大なカルデラができた。なだれ込んだ海水によって三五メートルの大津波が起き、スンダ海峡周辺で四万人が死んだ。火山史上最大の爆発を記念して百周年切手が発行された。



1983年6月8日、アイスランド発行。ラーカギーガル噴火200年記念。25kmの割れ目に100個の火口丘が残された。



1983年8月26日、インドネシア発行。クラカタウ噴火100年記念。残ったカルデラ壁にアナク・クラカタウ（子供のクラカタウ）が生じ、今でも活動が続いている。



1978年8月26日、ユーゴスラビア発行。トリグラフ初登頂200年記念。トリグラフの北壁。



1913年12月1日、スイス発行。マッターホルンが描かれた最初の切手。



1965年6月1日、スイス発行。マッターホルン初登頂100年記念と、アルプスに冬期の観光客が初めて訪れてから100年を記念している。

味の技、心でつくる



むさし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

むさし坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊 麹町店
(有楽町線麹町駅)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友贈ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

知られている。ぜいたくな名水を浴びての沢登りである。いくつかの小滝をやりすごす。最後はひどいガレ場だ。落石に肝を冷やしながら登りつめれば、表参道の二十丁目にたどり着く。そこで参道を下りてきた北尾根組と合流。

下りは、意外にきつく、また暑い。信仰のためには多少の苦労がないと有り難みがないのだろう。大きな岩石が露出、また崩れた石段が続いて不自然な歩行を強いられる。北尾根、また沢登りの涼しさをそれぞれに懐かしんでの山行だった。どちらも休憩・昼食を含んで約四時間のコース。参加三十人。(高橋重之)

INFORMATION



◆第三十三回マラソン大会

学生部

恒例の学生部主催・皇居一周マラソン大会を今年も開催します。

日時 十一月十日(日) 小雨決行

・九時 集合・受付 皇居桜田門

(地下鉄有楽町線 桜田門駅下車)

・十時 男女団体戦(四人一チーム、

一人皇居一周五キロ)

・十三時 男女個人戦(男子三周、

女子二周)

・十四時三十分 表彰式、のち閉会

式(解散後打ち上げ)

連絡先 学生部委員長・平沢徹

TEL・〇三―三九九三―八〇〇四

◆山岳図書を語る夕べ

図書委員会

香り高い山の文芸誌として知られた月刊誌「アルプ」が、一九八三年に終刊してから十余年の歳月が経ちました。「アルプ」は独特の境地をひらいた雑誌で、固有の世界を持つて多くのすぐれた遺産を残しました。

その創刊から終刊まで編集者・編集委員としてかわわってこられた三宅修氏を迎えて、三百号の歴史をふり返ってみます。

日時 十一月二十一日(木) 十八時三十分

十分

場所 日本山岳会集會室

講師 三宅修氏

◆全国大学山岳部監督会議開催

青年部・学生部・指導委員会共催

昨年は「大学山岳部における遭難

事故の際の法的責任問題」をテーマ

に活発な討論を展開し、高い評価を

いただきました。今年は、大学山岳

部にとってOB指導者が、現役の活

動にどこまで(どのように)かわ

るかを考えたいと思います。学生の

の自主性の尊重など問題が存在する

ことは確かですが、確たるポリシー

・信念を持つ監督方の意見を述べあ

っていただくことにより、得るもの

は多いと考えます。

日時 十一月三十日(土) 十三時〜十

七時(十七時三十分)懇親会

場所 神戸学生青年センター

阪急六甲駅下車

TEL・〇七八―八五一―二七六〇

テーマ「大学山岳部の指導(者)は

いかにあるべきか」

①講演「大学山岳部の現状と問題点」

講師 柳沢昭夫会員(文部省登山

研修所専門員)

②パネル・ディスカッション

パネリスト(候補者)

柳沢昭夫会員(前述)

白石昌孝会員(北海道大学・

北海道東北地区)

山本 篤会員(明治大学・関東

地区)

鈴木清彦会員(愛知学院大学・

東海地区)

鹿田 勝会員(関西大学・関西

地区)

未定(九州中国四国地区)

司会 熊崎和宏会員(成蹊大学)

会費 本会議二千元 懇親会五千元

*詳細に関する質問は熊崎へ(担当)

◆山岳講演会のお知らせ

岐阜支部

昨年の日大エベレスト登山隊・神

崎隊長の講演です。翌二十日は神

崎講師とともに貝月山(一二三四

メートル)へ懇親登山を行います。

日時 十一月二十二日(金) 十八時三

十分

場所 岐阜メモリアルセンター本館

テーマ 第一・第三の極地

講師 神崎忠男会員(常任評議員)

後援 朝日新聞社

◆山をテーマにした三人展

鈴木正俊Ⅱ木版・榎本進Ⅱ油彩・

三宅次郎Ⅱ油彩の展覧会です。

日時 十一月十一日(月)〜十六日(土)

十一時〜十八時(最終日十六

時)

場所 室町ギャラリー(東京都中央

区日本橋室町一―一三一―一〇

松崎ビル一F)

TEL・〇三―三三二四―八八八八

◆岩切岑泰個展

日時 十一月二十五日(月)〜十二月一

日(日)十一時〜十八時三十分

(最終日・十七時)

場所 銀座渋谷画廊(東京都中央区

銀座七―八―一)

TEL・〇三―三五七二―〇一四〇

〇三―三五七二―〇二四〇

ルーム日誌

8月

2日 常務理事会

3日 三水会

5日 集會委員会

6日 青年部 アルパインスケッチ

クラブ

8日 95同期会

13日 自然保護委員会 アルパイン

スケッチクラブ

14日 名誉会員を囲む会 山岳編集

委員会

26日 アルパインスキークラブ

27日 自然保護委員会 二火会

30日 青年部

8月来室者278名

図書室受入報告 (1996年 8 月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
三宅修・三宅岳	山岳写真の四季	167pp/19cm	東京新聞出版局	1996	出版社寄贈
読売新聞社会部 (編)	北極点をめざす野郎たち	197pp/18cm	読売新聞社	1978	江本嘉伸氏寄贈
地平線会議 (編著)	地平線の旅人たち：201人目のチャレンジャーへ	294pp/22cm	窓社	1996	江本嘉伸氏寄贈
林正一	石川県の山 (分県登山ガイドNo. 18)	111pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
宮本数男	福井県の山 (分県登山ガイドNo. 19)	111pp/21cm	山と溪谷社	1996	著者寄贈
宮本数男	福井県の山 (分県登山ガイドNo. 19)	111pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
加田勝利	静岡県の山 (分県登山ガイドNo. 21)	111pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
岡山県山岳連盟	岡山県の山 (分県登山ガイドNo. 32)	127pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
池田常道 (編)	山岳年鑑'95	254pp/26cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
B・セルビー	ナイル自転車大旅行記：女ひとりアフリカ砂漠を行く	300pp/20cm	新宿書房	1996	出版社寄贈
ギャジカン峰遠征隊	信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊「ギャジカン峰」	124pp/27cm	信州大学山岳会	1996	発行者寄贈
木下喜代男	飛騨の山スキールート：白き山麓の彷徨	56pp/26cm	木下喜代男(私家版)	1996	著者寄贈
福島功夫 (編)	ヌンブル峰登山報告書 1990	43pp/26cm	奥多摩山岳会	1996	発行者寄贈
田村康一 他 (編)	天山山脈トムール峰登山隊報告書 1994	77pp/26cm	天山登山倶楽部	1996	購入

日本山岳会会報 山 617 号

1996年 (平成 8 年) 10月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 村木潤次郎

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 双陽社

◆最近「東西南北」欄の寄稿が少なくなりました。このページは会員の皆様の「談話室」ですので、お気軽にご投稿ください。

◆イラストやカットを募集しています。腕に覚えのある会員のご投稿をお待ちしています。

(伊藤 敏)

■訂正 九月号一七ページ二段三行目「字賀」は「平賀」の誤りでした。お詫びして訂正します。

退会

小野庸一 (一九三五) 8・8・31
中野博義 (八七〇八) 8・8・31
山口良輔 (六一九七) 8・5・12
樋渡順一 (七七七八) 8・5・31
木下正明 (九七八四) 8・6・25
山崎彰人 (二〇七五) 8・7・21
千谷壮之助 (二七六九) 8・8・8
曲義則 (六四六五) 8・8・17

■会員異動

物故